

巻頭言



情報ユーティリティについて思うこと

近谷 英昭†



私がこの小文を書いている現在、丁度先進国主催者会議（東京サミット）が開かれており、経済問題などとともにエネルギー問題が最重要問題として討議されている。少なくとも我が国の場合、数年前までは石油エネルギー依存型の産業構造・社会構造をベースに経済的繁栄をめざして一途に突き進んでいたことを考えると、我々をとり巻く環境の変化と問題意識の変化の早さに改めて驚かざるを得ない。GNP と生活レベルの向上は長い間我々にとって善であったが、環境問題、貿易不均衡による経済的政治的軋轢そして資源問題という地球規模の問題に直面して、大幅な意識の変更と大きな決断が求められている。

ところで、一方においては社会の情報化が急速に進みつつある。情報化の意味するところは極めて広範であるが、情報処理技術並びにシステムの開発と応用に限ってみても、この10年間に産業、流通、交通、金融、環境、医療、研究、教育、行政などあらゆる分野に情報システムの導入が積極的に進められ、すでに我々の生活に欠くことのできない存在となっている。この傾向が今後とも続くことはほとんど疑いないところであり、おそらくは一層加速されるであろう。技術的側面からすれば、各種のハードウェア技術に加えてネットワーク技術、分散処理技術、データベース管理技術などの進歩は、それが社会的に受け入れられるか否かは別として、より高度なコンピュータ利用形態である情報ユーティリティの実現を可能にしつつある。すなわち、パブリック・ユーティリティとしてのエネルギーの供給と同様に、蓄積された多種大量の情報や計算処理機能（ソフトウェア）を不特定多数の利用者に随意に必要なだけ供給するという project MAC の思想が、より広域的より多様な形で実現される可能性が強まって来たといえよう。そこに蓄積される情報は、商品・流通、経済、食糧・資源、交通・運輸、気象・災害、医療、学術・技術、観光・レジャー・スポーツ、行政など広範囲に及び、それが望ましい形で機

能した場合は、経済の安定成長、資源や食糧の安定供給、生活福祉の高度化、学術や技術の進歩などにおいて大きな効用をもたらすものと期待される。更に、第17回情報処理学会大会の特別講演において東京大学猪瀬教授が指摘されたように、上記のような情報資源やソフトウェア資源は、際立った資源小国である我が国の貿易立国にとって、重要な Bargaining power となりうるものであり、したがって、情報ユーティリティへの動機あるいは指向性は我が国において最も強いといえよう。高品質の情報とソフトウェアの蓄積・共用技術の開発が、我々にとって最重要課題の1つと信ずるゆえんである。

このような情報ユーティリティを含む情報化の進展が社会に与える影響は非常に大きく、社会システム自身の構造的変化や意識変革を惹起すものと想像される。情報化社会の将来の姿については、多くの識者が情報ユーティリティの大きな効用とともにそれが望ましからざる形に利用される危険性を指摘している。例えば、プライバシーの侵害や権力の制御能力強化に伴う自由の抑圧などがそれである。そのような危険への防護技術や法制化の重要性はいうまでもないが、我々情報処理技術者にとって問題となるのは無意識にあるいは本意に悪しき陥穽におちいる危険性であろう。情報化が一つの革命であるとするれば、その推進の当時者である我々情報処理技術者が、その革命の真の行末について最も盲目的である恐れが十分ある。

社会に対して「我々は何をなすべきか」を考えることは比較的にはやさしい。しかし、それが結果として社会に「何をもたらすか」を正しく予見することは難かしい。情報化を真の善となすために、また、情報ユーティリティを我々の知的活動に対する真の増幅器となすために、我々の考えるべきことはまことに多いといわねばならない。

(昭和54年7月3日)

† 本会常務理事 鉄道技術研究所